

# SF化する現実 ——小松左京が予見した近未来——

高倉 克也



小松左京

大阪出身のSF作家の巨匠・小松左京(1931-2011)は1995年1月に発生した阪神・淡路大震災に箕面市の自宅で遭遇する。震災後は被災地をくまなく歩き、1年間にわたる新聞連載を『小松左京の大震災'95』と題して出版した。この過程で

小松は鬱病を患うことになる。すでに1973年に刊行した『日本沈没』で巨大地震の脅威をリアルに予見した小松は「震災の体験を社会の共有財産にするために、一人ひとりが語り続けていくことがもっとも大切だと思う」として未来につながる貴重な教訓を遺している。

## 『日本沈没』と『首都消失』

上下巻で385万部の空前のベストセラーとなった『日本沈没』は東京オリンピックが開かれ、名神高速道路が開通した1964年から執筆された。日本が華やかな高度経済成長を遂げる一方で災害列島であることを忘れたかのような風潮に対する一種の警鐘として9年がかりで完成した。

ざっとストーリーを追うと、地球物理学者であ

る主人公の田所博士は地震の観測データでかつてない地殻変動が起きていることを知り、小笠原諸島沖の日本海溝に潜って陸地を水没させるほどの巨大な亀裂と乱泥流を発見する。当初は田所の警告を信じなかった政府もやがて国民と資産を海外へ避難させるD計画を発動する。だが事態は予想を超えるスピードで進行し、各地で続発する巨大地震によって休火山も噴火するなど四国を皮切りに最後は北関東が水没して日本列島は完全に消滅してしまう。

『日本沈没』のいわば続編にあたるのが

1985年に発表した『首都消失』だ。通

常国会会期中に東京の交通・通信機能が完全に麻痺したら一体どうなるかという設定だ。小説では未曾有の緊急事態に大阪・万博跡地の迎賓館で全国知事会が招集され、新たに臨時政府を設置する。東京一極集中の危険性に防災の観点から警鐘を鳴らした作品とっていいだろう。

東日本大震災では首都・東京の交通・通信網も一瞬にして大混乱に陥った。小松のこれらの近未来SFをとっても架空の絵空事と見做すことはできない。



## 災害想定・報道の問題点

豊富な科学的知識とSF作家としての想像力を最大限に駆使した『日本沈没』ではマグニチュード7.6級の直下型地震によって退社ラッシュ時の高速道路が傾き、次々と車が落下・炎上する。このシーンに対して耐震工学の専門家は高架の建築基準に基づく高速道路が傾くはずはないと批判する。しかし阪神・淡路大震災では高速道路が傾くどころか脆くも横倒しになってしまう。ウォーターフロントでの液化化現象も含めていわゆる「想定外」の事態が勃発したのだ。

小松のSF的想定は計らずも現実の被害として実証されたことになる。こうした事態を受けて小松は阪神・淡路大震災直後のインタビューで従来の防災シミュレーションを抜本的に見直す必要があると語っている。

「なぜビルが倒れたのか、なぜ大火が発生して延焼が食い止められなかったのか。問題はたくさんあります。防災シミュレーションは今回のような貴重な体験が生かされなければなりません」

さらに小松は震災報道のあり方についても疑問を投げかけている。

「現場の状況をヘリで空撮したり、生き埋めの救出作業を実況するばかりで、自動車がどの経路を迂回すればいいのかとか、どの地域にはどこを届けばいいのか、避難所はどこかといった情報が伝えられない問題点があった。ワイドショー化したテレビの欠点が露呈した形になりました」

こうした小松の鋭い問題提起は残念ながら今回の東日本大震災に際してもほとんど生かされなかった。巨大災害による悲惨な歴史を繰り返さないためにもあらためて真剣に再考する必要があるだろう。

## 災害の記録は後世への財産

小松は東日本大震災の発生から約4カ月の7月

26日に80歳で死去した。その2日後に個人雑誌「小松左京マガジン」の最終号となる第42巻が発行された。最後のインタビューで小松は東日本大震災に言及しながら独自の災害防衛国家構想について語っている。それはみずからも震災体験者として地震災害と格闘してきた小松の渾身の遺言と見做していいだろう。

小松による災害防衛国家構想の基軸となるのはあらゆる分野を横断した総合防災学の確立だ。自然科学系だけでなく工学、社会学、経済学、政治学、法学、報道関係などの専門家を結集した総合防災学会を設立し、アカデミズム官僚主義を排した多角的な視点から地震災害をはじめとする防災対策について探究することを提唱している。稀代のSF作家としてジャンルを超えた創作力を発揮してきた小松ならではの柔軟な発想だ。

同時に小松は災害映像と被害データを世界中に提供し、これからの巨大自然災害に備えるべきだと市民レベルによる情報の共有化を繰り返し訴えている。そこでもっとも大切になるのが災害体験の生きた記録だ。大災害の場合、外部から状況を把握しようとするとかかなりの時間がかかる。そのあいだに小さな被害は忘れ去られ、災害の全容が見えなくなる。だからこそ被災した当事者による生きた記録が欠かせないのだと。

阪神・淡路大震災直後のインタビューで小松は「災害の記録は後世への財産として伝えていかなければならない」と語っている。それは災害列島のなかで生きていくわれわれの使命とっていいだろう。

小松左京 大阪市出身。京都大学イタリア文学科卒。星新一、筒井康隆と共に御三家と呼ばれる日本SF界を代表する作家。1990年「国際花と緑の博覧会」の総合プロデューサー。『日本沈没』、『首都消失』のほか『果しなき流れの果に』、『復活の日』、『さよならジュピター』などの代表作がある。